

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：20102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884051

研究課題名(和文) 19世紀末イギリスの進化社会理論における 機会の平等 概念の展開

研究課題名(英文) The Development of the Idea of Equality of Opportunity in Evolutionary Social Theory in the Late-Nineteenth-Century Britain

研究代表者

藤田 祐 (FUJITA, YUH)

釧路公立大学・経済学部・講師

研究者番号：90710830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：1890年代のイギリスにおける進化社会理論と政治思想のコンテキストで、『社会進化』で展開されたキッドの社会進化論における 機会の平等 概念の位置づけを分析し、 機会の平等 を中心理念に据えたウォレスの進化社会主義と比較対照した。両者の特徴的な共通点は、 機会の平等 をダーウィンの生物進化メカニズムと結びつけている点である。また、1890年代前後に雑誌や新聞に掲載された社会問題をめぐる議論を調査し、進化社会理論において 機会の平等 概念が展開したコンテキストを探究した。以上の分析を通じて、同時代のイギリスにおける 機会の平等 概念の勃興に進化理論が一定の役割を演じたという仮説が導き出された。

研究成果の概要(英文)：In the context of British evolutionary social theory in the 1890s, I have analysed how Benjamin Kidd presents the idea of equality of opportunity in his social evolutionism, developed in Social Evolution, and have compared and contrasted this with Alfred Russel Wallace's evolutionary socialism, the core of which is the ideal of equality of opportunity. Their common feature is that they connected the idea of equality of opportunity with the Darwinian mechanism of biological evolution. Also, I have made an inquiry on articles about the social problem published in about the 1890s, and have explored the context of the idea of equality of opportunity developed in evolutionary social theory. These analyses have lead to the hypothesis that evolutionary theory played a key role in the rise of the idea in that period.

研究分野：近代イギリス思想史

キーワード：思想史 西洋史 ヴィクトリア時代研究 進化社会理論 社会進化論 リベラリズム 社会主義 機会の平等

1. 研究開始当初の背景

機会の平等 は、20 世紀初頭の自由党内閣の社会政策を支えたとされるニュー・リベラリズムの中核を成す理念の一つとされる。しかしながら、機会の平等 という理念が 19 世紀末にどのように勃興し、どのように展開し、どのようにニュー・リベラリズムに流れ込んだのかに関する研究は十分になされていないとは言いがたい。

また、「機会の平等」という言葉が広まるきっかけの一つとされる、ベンジャミン・キッド『社会進化』(1894)に関しても、社会ダーウィニズム研究で取り上げられてはいるものの、同書で展開された社会進化論を深く分析した研究はほとんどなされていない。同時代において『社会進化』は、英米両国でベストセラーになるとともに、様々な言語に翻訳されて世界中で読まれることになったが、社会進化論の没落とともに急激に忘れ去られて研究も盛んとはほど遠い状況にある。しかしながら、1890 年代のイギリスにおける機会の平等 概念の展開を探る際に無視することは許されない。

ダーウィンとは独立に自然選択理論に辿り着いたとされている A・R・ウォレスは、後半生において土地国有化運動を主導するとともに社会改革を唱える社会主義者として言論活動を行った。そして、19 世紀末に至るとウォレスは 機会の平等 を自らの社会主義にとって不可欠の理念として提起するようになる。機会の平等 に基づく自由な競争こそ「真の個人主義」であり、機会の平等こそ個人主義と社会主義を調和させる理念であると主張するようになるのである。

19 世紀終わりから 20 世紀初頭に至る世紀転換期のイギリスでは、社会問題(貧困問題)への関心の高まりに伴って社会に対する国家の役割をめぐって様々な観点から議論が展開されていた。このような論争を通じて、国家の積極的な役割を認めるニュー・リベラリズムが勃興したのである。機会の平等 概念の展開を探究するためには、総合雑誌などの出版物上で展開された議論を調査して分析する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、同時代における知のコンテキストでキッドとウォレスの思想を分析するとともに、1890 年代のイギリスで出版された雑誌や新聞での議論にも目を向けて、進化社会理論という側面から 1890 年代のイギリスにおける 機会の平等 概念の展開を探るものである。第一に、19 世紀後半における進化社会理論の展開というコンテキストで、キッドとウォレスが自らの理論においてどのように 機会の平等 概念を位置づけているかを探究し、生物進化理論に基づいて展開された社会理論において提起された 機会の平等 という理念の意味づけを探究した。第二に、雑誌や新聞で同時代に展開された社会問題

をめぐる議論を調査し、社会問題に対してどのような理念を提起するべきかという議論を分析して 機会の平等 という理念が提起されたコンテキストを探究した。これら二つの観点から進化社会理論を軸として 1890 年代のイギリスにおける 機会の平等 概念の展開を探るのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)

先行研究をふまえてベンジャミン・キッドとウォレスの進化社会理論を分析した。特に、『倫理学のデータ』を含む『倫理学原理』におけるハーバート・スペンサーの理論に対して両者がどのような議論を展開しているのかに焦点を合わせて、キッドとウォレスの理論における 機会の平等 概念の位置づけを分析した。また、同時代にキッドやウォレスの進化社会理論がどのように論評されていたのかを調査し、同時代におけるキッドとウォレスの進化社会理論の位置づけを探究した。

(2)

1890 年代に出版された総合雑誌や新聞における議論を調査し、個人主義と集団主義の論争という社会問題に対する国家の役割をめぐる論争のコンテキストで、どのような理念が提起されたのかを分析した。その成果をふまえて、そのような議論のコンテキストで 機会の平等 概念がどのように勃興したのかを分析し、進化社会理論における 機会の平等 概念の展開との関連性を探究した。

4. 研究成果

(1)

機会の平等 という概念が広く流布するきっかけとなった著作と言われる『社会進化』はどのように位置づけられるべきであろうか。機会の平等 が実現して 社会の能率が高まる過程を社会進化の過程と捉えたキッドの社会進化論はどのように解釈されるべきであろうか。キッドの社会進化論に関する包括的な研究はほとんどないものの、『社会進化』は社会ダーウィニズムを代表する著作の一つとして社会ダーウィニズム研究で取り上げられてきた。『社会進化』で展開された社会進化論は集団間の生存競争を正当化した典型的な社会ダーウィニズムだと解釈される一方で、社会改革を正当化したニュー・リベラリズムと親和的な「改革ダーウィニズム」という位置づけも与えられてきた。

このような先行研究での位置づけを踏まえた上で、本研究では、自然と社会の関係という観点から、キッドが『社会進化』で展開した社会進化論を分析した。そして、キッドの理論が、社会進化の過程を専ら生存競争と自然選択という生物進化のメカニズムを通じて引き起こされると論じているものであ

ると解釈すべきだという結論に到達した。根拠となる要素の一つは、キッドの社会主義批判である。キッドによれば、社会主義の理想は生存競争を停止することであり、ゆえに、社会主義の理想社会では、社会進化のメカニズムが働かないことになる。この点を考慮すれば、キッドの社会理論では社会進化の過程が生物進化の過程に還元されていると解釈するのが妥当である。また、キッドの社会進化論において 機会の平等 が実現するのはあくまで生存競争を通じた社会進化の過程で、社会改革に向けて人間が主体性を発揮する余地はない。ゆえに、キッドが 機会の平等 という理念の実現を肯定的に論じているとはいえず、『社会進化』は生物進化論に基づく社会進化論の典型と言えるのである。

この点は、人口という観点から『社会進化』を分析することによっても裏付けられる。ダーウィンの進化理論において、生存競争と自然選択を駆動するのは人口増加の圧力である。キッドによれば、社会主義の理想社会は、人口調整が行うことで競争を抑制しているために、社会進化の過程が機能しないのだ。また『社会進化』では、人口理論や人口データに基づいて、社会進化論が正当化されている。人口増加の圧力が社会進化の原動力と捉えられているだけでなく、人口のデータに基づいて人口が増加した集団を社会進化の結果として優越した集団とみなしている。つまり、人口増加が、社会進化の動因であるとみなされていると同時に、社会進化の帰結とみなされているのだ。人口増加と並行して、機会の平等 が実現する過程と 社会の能率が高まる過程が相互作用しながら引き起こされる。しかしながら、キッドは、このように社会進化と結びつけられる人口増加の圧力をどのように制御すべきかについては論じていない。ここでも人間の主体性が残されていないと言える。この点からも、キッドの社会進化論は、社会を生物進化の過程に委ねるのが最善であるという社会進化論の典型と言えるのだ。

後に 機会の平等 概念を広めた著作として『社会進化』を評価したウォレスは、出版直後に出した書評では、『社会進化』に高い評価を与えながらも、大土地所有制度と遺産相続制度を改革しない限り 機会の平等 はありえないとしてキッドの社会進化論における 機会の平等 概念の定式化を批判する。1870年代から土地制度改革運動に関わり、1880年代初頭には土地国有化協会を結成して会長として土地国有化運動を先導したウォレスにとって、 機会の平等 という理念は土地制度改革による土地を利用する機会の平等化と結びつくべき理念だったのである。さらに、ウォレスは「真の個人主義」という論文で、 機会の平等 という理念を自らの社会主義の中心に据える。ウォレスによれば、 機会の平等 は自由を重視する 個人主義 と平等を重視する 社会主義 を調

和させる理念であり、機会の平等に基づく自由競争を唱道する自らの社会主義こそ「真の個人主義」なのである。同時にウォレスは、大土地所有制度と遺産相続制度を改革することで機会の平等が実現して初めて、自然進化のメカニズムによる人間性の向上が引き起こされるとも主張する。機会の平等を実現する社会改革と公正な競争を通じた人間性の発展こそウォレスの進化社会主義を特徴づけるものなのである。

以上のように、本研究では、 機会の平等 という軸でキッドとウォレスの進化社会理論を分析することで、両者の共通点と違いを明らかにした。両者の共通点は、両者とも 機会の平等 をダーウィンの進化メカニズムと結びつけているところである。キッドは、社会の能率が高まるとともに 機会の平等 が実現していく過程を社会進化だと捉えるだけでなく、 機会の平等 が実現していくと競争の裾野が広がって生存競争が苛烈になることでますます社会進化が進展することも論じた。機会の平等化と社会進化を並行する過程と捉えたキッドに対して、ウォレスは 機会の平等 が実現することを社会進化の前提条件だと考えた。自然選択を通じて人間性を向上させるためには、土地国有化を中心とする社会改革を通じて公正な競争を支える 機会の平等 を実現するしかないのだ。また、キッドとウォレスは、19世紀後半のイギリスを代表する進化理論家であったスペンサーの異なる側面に批判の矛先を向けている。自己の利益と他者の利益、そして個人の利益と全体の利益が調和していくのが社会進化の過程であり最終的には利己主義と利他主義は一致するというスペンサーの理論を批判して、キッドは、社会進化は合理性を実現する過程ではなく宗教性に根ざした「超合理的」な過程であることを強調する。対してウォレスは、19世紀半ばの『社会静学』で土地私有の不正という議論を提起していたスペンサーが19世紀末になると土地国有化に反対して地主の財産権を擁護した点を批判し、自らの社会主義における中心理念である 機会の平等 をスペンサーの正義論に基礎づけようとする。

以上の通り、本研究では、1890年代に展開されたキッドとウォレスの進化社会理論で核となる概念として機会の平等がどのように定式化されたのかを明らかにした。

(2)

20世紀初頭にニュー・リベラリズムの中心理念の一つであると位置づけられることになる 機会の平等 概念は、古典的リベラリズムからニュー・リベラリズムへの移行期の終盤となる1890年代前後の時期にどのような形で社会に浸透していったのであろうか。本研究では、包括的に網羅することはできなかったものの、1890年代前後のイギリスで出版された総合雑誌や新聞の記事を調

査することで、いくつかの点を明らかにすることができた。

まず「機会の平等」という言葉は、1880年代後半から社会主義者によって不平等の是正を主張する理念として用いられていた。労働者階級の利害を代表しようとする社会主義政党、独立労働党が20世紀になった直後に発行した政治パンフレットにも「平等な機会」というタイトルで、富裕層と貧困層の子どもを比較して貧困層にのしかかる機会の不平等を是正すべきだという主張がなされている。スペンサーの影響を強く受けた作家であり文筆家でもあるグラント・アレンは、1880年代終わりに出した論考で、「機会の平等」という言葉は用いていないものの、公平な競争という理念を提起している。当時個人主義者と呼ばれていた人々が地主の財産権を擁護して資産の格差を容認したことに対して、アレンは、全員が同時にスタートする公平な競争なくして個人の自由を擁護する個人主義はありえないという批判をぶつける。このようなコンテキストにおいて、ウォレスがスペンサーの正義論を批判する際に「機会の平等」という言葉を使用し、キッドが社会進化を機会の平等という価値を実現する過程として捉える『社会進化』出版した。さらに、キッドの社会進化論を受けてウォレスが「機会の平等」を自らの社会主義の中心理念に据え、このような1890年代における「機会の平等」概念の展開を経てニュー・リベラリズムが勃興したのである。

(3)

本研究での1890年代の「機会の平等」概念の展開に関する分析と調査に基づくと、世紀転換期のイギリスにおける「機会の平等」という理念の勃興において、生物進化理論に基づく社会理論が一定の機能を果たしたという仮説が導き出される。しかしながら、この仮説を論証するためにはさらなる進化社会理論の分析と雑誌や新聞における言説の調査が求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

藤田 祐 「ベンジャミン・キッド『社会進化』と人口」『マルサス学会年報』第24号 2015年 pp.157-184 (査読無)

藤田 祐 研究ノート「社会ダーウィニズム 研究とベンジャミン・キッド『社会進化』」『釧路公立大学紀要 人文・自然科学研究』第27号 2015年 pp.51-67 (査読無)

[学会発表](計 2件)

藤田 祐 「19世紀末イギリスの進化社会理

論における 機会の平等 概念の展開
ベンジャミン・キッドの社会進化論と
A・R・ウォレスの社会主義における
位置づけ」日本イギリス哲学会第39回
研究大会 2015年3月29日 甲南大学
岡本キャンパス(兵庫県神戸市)

藤田 祐 「ベンジャミン・キッド『社会進化』と人口」マルサス学会第24回大会
2014年6月28日 関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤田 祐 (FUJITA YUH)
釧路公立大学 経済学部 講師
研究者番号: 90710830